

新聞4コマ漫画が描く菅直人首相（中編）

—首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2010～2011—

Prime Minister Naoto Kan in Newspaper Comic Strips (Part 2): An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2010–2011

水野 剛也

Takeya MIZUNO

はじめに 前編の要約と中編のねらい

本論文は、菅直人首相の在任期間中（2010年6月8日～2011年9月2日）に3大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本誌前号（第52巻・第2号、2015年3月）に掲載した前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰した。

本号に掲載する中編からいよいよ本題に入り、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）、そして『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）を質的に分析する。

本誌次号（第53巻・第2号）以降に掲載する予定の後編では、『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）と「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同じ方法で分析した上で、結論として分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示する。

1 本論文の目的・方法・意義、および構成

本誌前号（前編）に掲載。

2 量的な側面から見た全体的な傾向

本誌前号（前編）に掲載。

3 新聞4コマ漫画が描く菅首相

本項では、菅首相を描いた作品を漫画ごとに質的に分析する。

・アサッテ君 (東海林さだお) 『毎日新聞』(朝刊)

『毎日新聞』の朝刊で連載されている「アサッテ君」(東海林さだお)は、平凡な会社員の朝手春男とその家族の庶民的な日常生活を、ときに時事問題に絡めて描く漫画である。朝手家は6人家族で、主人公・春男、妻・秋子、小学生の長男・夏夫、幼稚園児の長女・冬美、春男の両親・昼吉と夕子、からなる。作品の舞台となるのは主に彼らの家庭や職場である。連載を開始したのは1974年6月で、2003年11月に1万回を達成、2014年6月には連載40周年を迎え、さらに2014年8月には一般全国紙の4コマ漫画として最多連載記録を更新(1万3,616回)した。しかし、2014年12月31日号をもって最終回となり、記録は1万3,749回で停止した。後継作品は「桜田です!」(いしかわじゅん)で、2015年2月1日号から連載を開始し、本論文執筆時点(2015年7月)でも150回を超えて継続中である。¹²

「モテない、カネない、度胸もない」主人公とは対照的に、作者の東海林さだお(本名・庄司禎雄)は長年にわたりめざましい活躍をつづけている漫画家である。1937年に東京都杉並区で生まれた東海林は、早稲田大学入学後から本格的に漫画を描きはじめ、大学を中退後、1967年に実質的なデビュー作である「新漫画文学全集」(『週刊漫画TIMES』)の連載を手がけた。その他の代表作として、「タンマ君」(『週刊文春』)、「サラリーマン専科」(『週刊現代』)、「ショージ君」(『週刊漫画サンデー』)などがあり、食べ物に関するコラム「あれも食いたい これも食いたい」(『週刊朝日』)でも有名である。受賞(章)歴も多彩で、第16回文藝春秋漫画賞(1970年)、第11回講談社エッセイ賞(1995年)、第45回菊池寛賞(1997年)、紫綬褒章(2000年)、旭日小綬章(2011年)、などがある。2001年には「アサッテ君」で第30回日本漫画家協会賞大賞を受賞している。¹³

少なくとも小泉純一郎以降、「アサッテ君」は毎年、一定数の作品で必ず現役の首相を取りあげてきたが、その特徴は菅の在任期間中も継続して見られた。「地球防衛家のヒトビト」(『朝日新聞』夕刊、368本中18本=4.89%)には及ばないものの、384本中6本(1.56%)の作品で菅を描いている。先行研究(本論文前編・後注3参照)が「時事的4コマ漫画」と特徴づけているのも十分に首肯できる。なお、小泉から菅までの6人全員を複数の作品で描いているのは、3大紙の4コマ漫画のなかで

表11 「アサッテ君」における首相を描いた作品の頻度と本数(首相別、上から頻度の高い順)

| | |
|-------|----------------------|
| 鳩山由紀夫 | = 2.70% (259本中7本) |
| 麻生太郎 | = 2.38% (335本中8本) |
| 安倍晋三 | = 2.37% (337本中8本) |
| 菅直人 | = 1.56% (384本中6本) |
| 小泉純一郎 | = 0.87% (1,825本中16本) |
| 福田康夫 | = 0.59% (335本中2本) |

は「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」だけである。いずれの首相についても、「アサッテ君」の本数・頻度は「地球防衛家のヒトビト」について多い。また、同じ時事漫画でも、先行研究は「アサッテ君」を「世論反映型」、「地球防衛家のヒトビト」を「自己主張型」と区別して特徴づけているが、この点については後述する。¹⁴

「アサッテ君」における菅の「描かれやすさ」を、頻度を基準に小泉以降の5人と比較すると、中間のやや後方に位置づけられる。在任期間が異なるため頻度の高い順にならべると、表11が示すように、もっとも「描かれやすい」鳩山から数えて4番目となる。2.00%を超えた鳩山・麻生・安倍（第1次、以下略）の3人には及ばないが、小泉・福田よりは頻繁に描かれている。「アサッテ君」において菅は、前任者たちと比較してとくに「描かれにくい」というわけではないが、かといって「描かれやすい」首相でもなかったといえる。この背景として、2011年3月11日に発生した東日本大震災、および東京電力福島第一原発事故以降、菅を描いた作品が1本もない事実を見逃すことはできない。この点についてはあらためて論じる。なお、本論文の前編で示した知見と統合すると、表11の順位は3大紙すべての4コマ漫画を合計したそれと完全に一致する。

次に、菅を描いた6本の作品の質的な分析に移るが、そこで参考になるのは、とくに安倍・福田の作品を分析した先行研究である。そこで示されている類型化モデルは小泉の先行研究を微調整したもので、「アサッテ君」の首相描写をまず政治的な批評性・風刺性の濃淡により2パターンにわけ、両パターンをさらに現実の言動・フィクションという2つの要素により細分化する、というものである。麻生・鳩山を扱った先行研究もこの分析モデルを採用している。

より具体的には、先行研究は「アサッテ君」の首相描写を以下の4パターンに大別している。

1 批評・風刺性薄い+現実

現実にあった首相の言動や政治・社会問題に関連させて首相を登場させるが、最終的には家庭内の些事など首相や政治問題とは関係の薄いオチやシャレに帰結させる。

2 批評・風刺性薄い+フィクション

パターン1と同じく政治とは関係の薄いオチやシャレにつなげるために首相を登場させるが、そこで示される首相の言動や政治・社会問題は現実のものでなく、作者がつくりだしたフィクションである。

3 批評・風刺性濃い+現実

現実にあった首相の言動や政治・社会問題に関連させて首相を登場させ、かつ主人公一家をはじめ一般庶民に皮肉っぽく首相を語らせる。

4 批評・風刺性濃い+フィクション

パターン3と同じく主人公一家をはじめ一般庶民に皮肉っぽく首相を語らせるが、そこで示される首相の言動や政治・社会問題は現実のものでなく、作者がつくりだしたフィクションである。

アサッテ君

東海林さだお

(12381)

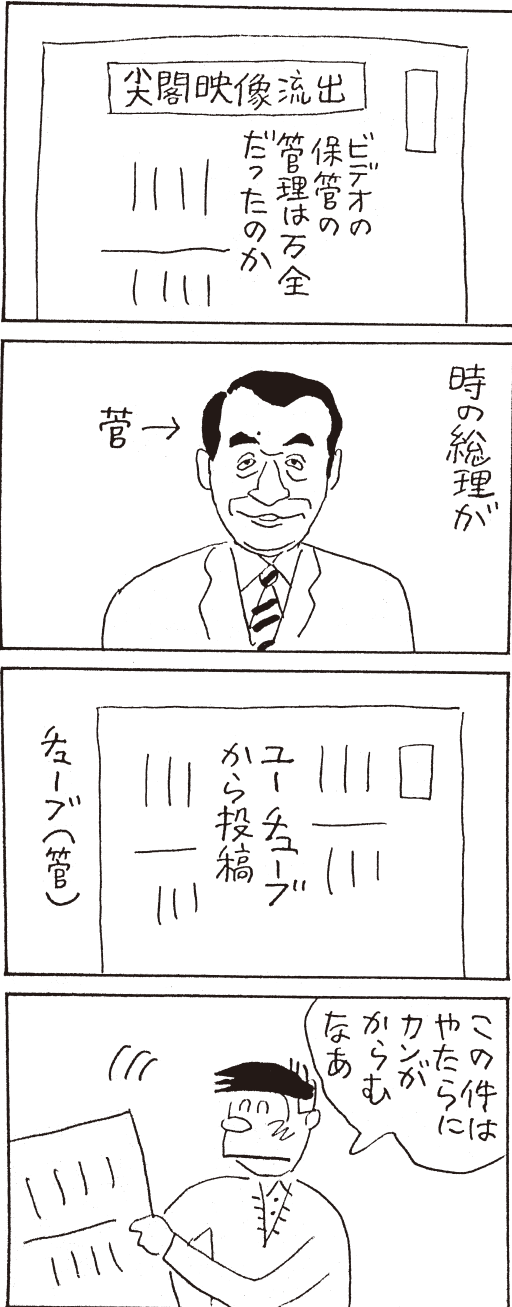


図1 2010年11月16日号 (No.12381)

先行研究によれば、各類型は互いに完全に排他的でなく、1つの作品に複数のパターンが混在する場合や、どのパターンに分類すべきが明確に判断しにくい場合もある。ただし、菅を描いた作品のほとんどは、いずれかのパターンに比較的容易にあてはめることができる。このことから、上述の類型化モデルが相当の妥当性を有していることがわかる。

個々の作品を分析する前に、全体を見わたして目につく特徴は、現実の事象にもとづき首相を描く作品が多い一方、政治的な批評・風刺性は薄い傾向があることである。分類の内訳はパターン1 (批評・風刺性薄い+現実) が4本、パターン2 (批評・風刺性薄い+フィクション) が1本、そしてパターン3 (批評・風刺性濃い+現実) とパターン4 (批評・風刺性濃い+フィクション) の混合が1本、である。すなわち、菅を描いた6本のうち5本は現実としてあった首相の言動や政治・社会問題に絡めて描いているが、批評・風刺性に着目すると、明確な政治的メッセージが込められているのは1本しかなく、首相に対する批判性は希薄である。

前任者の鳩山由紀夫と比較すると、首相の現実の言動を題材にしている点 (鳩山を描いた7本すべて) は似ているが、批評・風刺性の濃い作品が過半数を占めたという点 (7本中少なくとも5本) では大きな差異が認められる。少なくとも「アサッテ君」では、菅は鳩山ほど批判的に描かれているわけではない。鳩山の描かれ方について先行研究は、「発言や行動がそのまま漫画の題材にできるほど社会で注目を浴び、かつ批評・風刺しやすいものであったと考えることができる」という解釈を示しているが、菅の言動にはそのような要素が比較的になかったのかもしれない。た

だし、先行研究が指摘しているように、もともと「アサッテ君」で主流をなすのは批評・風刺性の薄い作品であり、菅ではなく鳩山の描かれ方がむしろ特徴的であったと見るのが自然である。また、個々の作品の分析で明らかにするように、批評・風刺性が薄い作品が多かったからといって、必ずしも菅が好意的に描かれているというわけではない。

次に、菅を描いた6本の作品を上述の4類型に照らして分析すると、パターン1（批評・風刺性薄い+現実）には過半数の4本が該当した。現実としてあった菅の言動や政治・社会問題に関連づけて首相を登場させるが、最終的には非政治的なオチやシャレに帰結させるこの描き方は、先行研究が指摘するように本来は「アサッテ君」が「もっとも得意とするパターン」である。

わかりやすい例が2010年11月16日号（No.12381、図1）と2011年2月17日号（No.12470、図2）の作品で、いずれにおいても首相はダジャレの対象とされている。まず図1について、沖縄県・尖閣諸島沖で中国の漁船と海上保安庁の巡視船が衝突し、その映像がインターネット上に流出した（1コマ）ことは現実に発生した問題である。この作品は、衝突の映像が動画投稿サイトの「ユーチューブ」（YouTube）に流されたこと（3コマ）、「チューブ」は日本語で「管」（音読みで「カン」と訳されること（3コマ）、そして現職の首相が「菅」（かん）であることをとらえ、「この件はやたらにカンがからむなあ」（4コマ）という春男のたわいのないダジャレで終わっている。図2もまったく同様で、作品の主眼は現実としてある諸問題と首相をダジャレでつなげることであり、政治的な批評・風刺は一切読みとれない。なお、図2で題材とされているのは、アニメ

アサッテ君

東海林さだお

(12470)

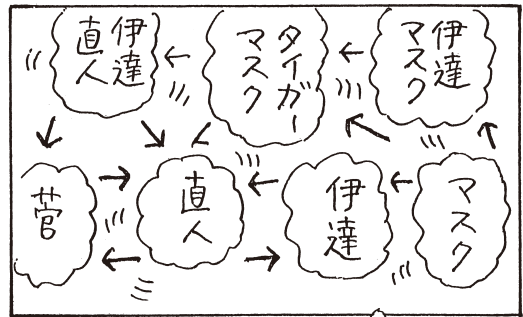
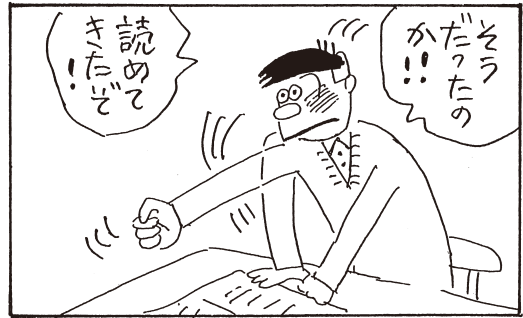
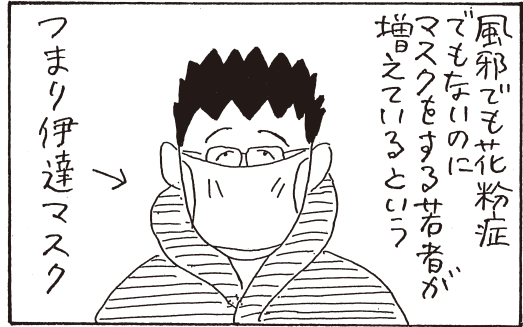


図2 2011年2月17日号（No.12470）

アサッテ君

東海林さだお

(12366)



図3 2010年10月31日号 (No.12366)

「タイガーマスク」の主人公である「伊達直人」を名のる人物が、前年暮れからあいついで全国各地の児童養護施設などにランドセルや現金を届けた現象である。

2010年10月31日号 (No.12366、図3) の作品は、ダジャレに加えて家庭内の些事をも含めているという点で、パターン1の特徴を凝縮した事例である。菅首相と仙谷由人官房長官に関する新聞記事(1コマ)をきっかけに春男と昼吉が熱心に議論している様子(2~4コマ)を見て、秋子が「カンカンゴクゴクね」(4コマ)とほほえんでいる。秋子の台詞は「菅」(かん)と「仙谷」(せんごく)をあわせたもので、「侃侃諤諤」(かんかんがくがく)のダジャレである。現実には存在する政治家とともに首相を登場させるが、最終的には何の変哲もない家庭内の出来事とたわいのない言葉遊びに帰結させており、政治的な含意はほとんど読みとれない。なお、1コマ目に描かれている新聞報道の内容は明らかでないが、仙谷の写真が菅のそれより若干大きく描かれていることを考えると、当時、仙谷が「影の首相」とよばれるほど政権内で存在感を強めていたことに関する記事かもしれない。¹⁵

補足的に、図3(見方によっては図1と図2も)で見られる、新聞などマス・メディアの報道を媒介して登場人物が首相について見知る・語るという構図は、先行研究が指摘しているように、「アサッテ君」以外でも広く見られる新聞4コマ漫画独特の描写法である。この点についてはあらためて論じる。

さらに補足すると、図3のように他の政治家と対比・並列して首相を描く手法は「自己主張型」の「地球防衛家のヒトビト」(『朝日新聞』夕刊)でよく採用されるが、とくに麻生以降、「世論反

映型」の「アサッテ君」でも見られるようになってきた。次に分析する図4でも同じ描き方がされており、批評性・風刺性の濃淡は別として、他の政治家と対比・並列する首相描写は「アサッテ君」でも定着しつつあるといえるかもしれない。

パターン1に属する最後の1本は2010年9月3日号（No.12310、図4）の作品で、民主党代表選で現職の菅と小沢一郎元代表（前幹事長）が争っていることを、サッカー・ワールドカップ（南アフリカ大会）の勝者予想で話題となったタコの「バウル」を題材に描いている。代表選が菅と小沢の一騎打ちになったことも、ドイツの水族館のタコが勝ちすすむサッカーチームを連続して的中させたことも、実際に起こった出来事である。もっとも、「バウル」が代表選の結果を予言した事実はないので（4コマ）、パターン2（批評・風刺性薄い+フィクション）の要素も多少は含んでいるといえるかもしれない。しかし、分析対象である「首相」その人が架空の言動をしているように描かれているわけではないので、本論文の趣旨に照らせば図4はパターン1（批評・風刺性薄い+現実）に分類するのが妥当である。菅と小沢の対立を政治的な文脈で皮肉ることを主眼としているともいえない。なお、この作品が掲載されてから11日後の9月14日、菅は小沢を大差で破り民主党代表に再選されている。¹⁶

次に、パターン2（批評・風刺性薄い+フィクション）に該当するのは、2010年6月10日号（No.12243、図5）の1本だけである。首相就任から2日後に掲載されたこの作品は、菅夫妻の架空のやりとりを次のように描いている。

- ・新首相を紹介する新聞記事を読んだ秋子が、菅伸子夫人が1歳年上の64歳であることに興

アサッテ君

東海林さだお

(12310)

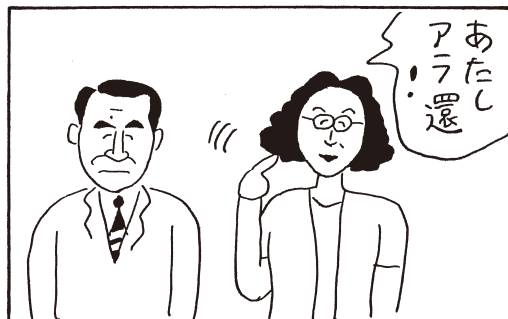
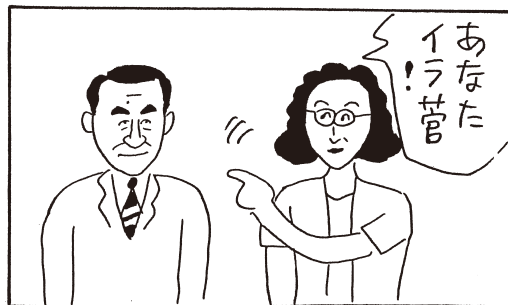


図4 2010年9月3日号（No.12310）

アサッテ君

東海林さだお

(12243)



味をもつ。(1~2コマ)

・夫人が首相にむかって「あなたイラ菅!」、自身を「あたしアラ還!」とダジャレをいう。(3~4コマ)

「イラ菅」(3コマ)は気性の激しさからつけられた首相のあだ名、「アラ還」(4コマ)は「アラウンド還暦」の略、つまり60歳前後の人物のことである。「イラ」と「アラ」、および「菅」と「還」のダジャレで終わっていることからわかるように政治的な批評・風刺性は希薄であり、かつ首相夫妻のやりとりは作者が創作したフィクションであることから、パターン2に分類できる。

なお、この問題はのちに総括するが、図5にもマス・メディアを通して登場人物が首相について見知る・語るという構図が見られる点に言及しておく。

最後に、パターン3(批評・風刺性濃い+現実)とパターン4(批評・風刺性濃い+フィクション)の特徴をあわせもつのが2011年2月1日号(No.12456、図6)の作品で、菅を描いた6本のなかで唯一、明確な政治批判性を見せている。三島由紀夫の小説『仮面の告白』を読んでいる春男が、「そういえば菅首相は」「『私は仮免』といったが」(2~3コマ)と思いだし、最後に首相の架空の著作『仮免の告白』(4コマ)を描いて終わっている。菅が実際に発した言葉「仮免」を示し、そのダジャレとして実際には出版されていない著作を描くことで、首相が軽率な発言で批判を浴びていたことを揶揄している。首相は支持者との会合(2010年12月12日)で「いままで仮免許だった」とのべ、職責の重さに対する認識不足を指摘されていた。

これまでの知見をまとめると、「アサッテ君」

図5 2010年6月10日号(No.12243)

において菅は、過去の首相、とくに同じ民主党の鳩山と比べるとさほど「描かれやすい」首相とはいえ、かつ政治的な批評・風刺の対象となることも少なかったといえる。先行研究は、鳩山の「描かれやすさ」の本質を「落差」、つまり、総選挙による政権交代で華々しい船出をしたものの、わずか8ヵ月後には支持率（朝日新聞社の世論調査）を10%台まで落とした末、突然に辞任したという、その急降下ぶりに見いだしている。この分析に照らせば、鳩山を引き継いだ菅は国民の期待感や失望の振幅が相対的に小さかった分、描かれる頻度も低く、また政治的に批評・風刺されることも少なかったと考えられる。

鳩山と比較して菅が作品の対象になりにくかったことは、菅の首相就任当日の2010年6月8日号（No.12241、図7）の作品で、菅ではなく退任する鳩山が描かれていることからわかる。「最低でも回転ずし」をおごとと約束する春男に対し（1～3コマ）、妻の秋子が「最近は『最低でも』が信用できないからねえ」（4コマ）とうつぶしている。鳩山は首相になる以前から、沖縄県にあるアメリカ軍の普天間飛行場を「最低でも県外（に移設する）」（4コマ）と公言していた。その公約を実現できないまま辞任してしまった鳩山をあてこする内容である。菅が新首相になったことよりも、鳩山が首相でなくなったことのほうが「アサッテ君」では重視されている。

補足として、その3日後の2010年6月11日号（No.12244、図8）の作品も退任した鳩山を強く示唆する内容であり、菅に比べ鳩山がいかに「描かれやすい」首相であるかを印象づける。民主党両院議員総会（6月2日）で辞任表明演説をした鳩山は、唐突に「韓国の済州島のホテルのテラスに一羽のヒヨドリが飛んでまいりました」などと

アサッテ君
東海林さだお



(12456)



図6 2011年2月1日号（No.12456）

アザケ君

東海林さだお

(12241)

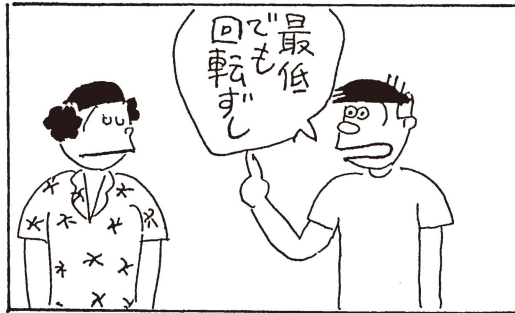


図7 2010年6月8日号 (No.12241)

アザケ君

東海林さだお

(12244)

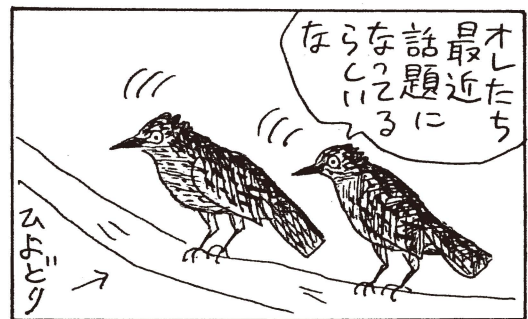
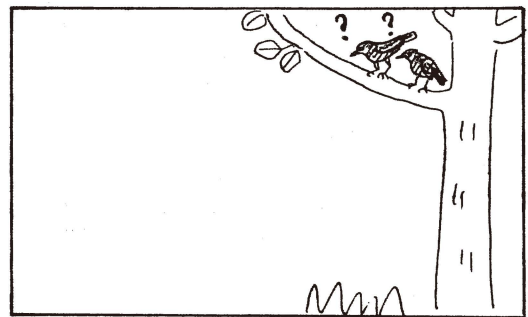


図8 2010年6月11日号 (No.12244)

発言し、その不可解さが話題になっていた。このように辞任後も作品の題材とされつづける鳩山とは対照的に、菅は首相辞任以降、1度も「アサッテ君」に再登場していない。

さらに付言すると、菅の在任期間最終日の「アサッテ君」には、またしても菅ではなく後任の野田佳彦が描かれており、菅は最後まで存在感が薄いままであった。2011年9月2日号（No.12624、図9）の作品がそれで、民主党代表選（8月29日）の決選投票前に野田が自身を「どじょう」にたとえる政見表明をしたことが題材とされている。野田がどの程度「描かれやすい」首相であるかは、今後の研究で実証的に突きとめる必要がある。しかし、少なくとも本論文の知見から判断する限り、菅は民主党初の首相となった鳩山の影に隠れがちで、結局、退任するまで「アサッテ君」の作品世界で存在感を強く発揮することはなかったといえる。

もっとも、小泉首相以降の「アサッテ君」の作風をより長い時間枠で見れば、菅の描かれ方はむしろ通常への回帰ととらえるべきかもしれない。菅が作品に登場する頻度は、他の首相のそれと比べいちじるしく低いわけではないし（表11）、政治家や政治問題とは関係の薄いオチやシャレに帰結させるのも、「アサッテ君」が本来「もっとも得意とするパターン」だからである。現実の政治・社会問題を題材とする作品が多い点にしても、先行研究がくり返し指摘しているように、「社会で話題となっている事象を積極的に取りあげているという意味で時事性が強く、世相を敏感に反映」という従来からの「世論反映型」としての特徴に照らして自然である。他方、それゆえに「世論と連動して首相の描き方に相当な柔軟性・可変性がある」とも考えられ、菅を描いた作

アサッテ君

東海林さだお

(12624)

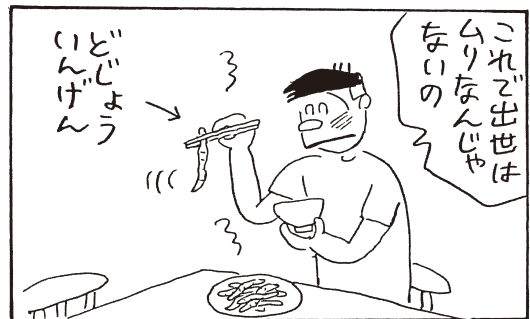
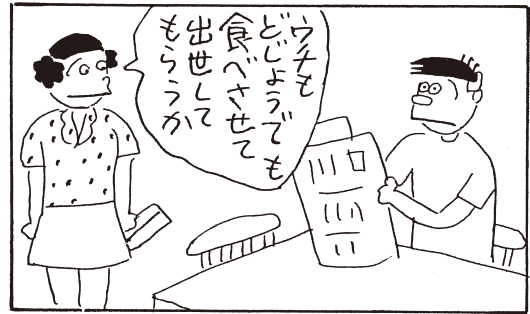
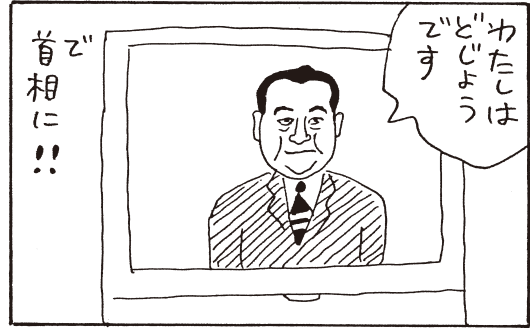


図9 2011年9月2日号（No.12624）

アサツテ君

東海林さだお

(12514)



図10 2011年4月2日号 (No.12514)

品と同じ特徴が野田、および自民党の安倍（第2次）にも見られるとは限らない。先行研究が指摘しているように、今後も「より長い時間枠で作品を分析する視座が不可欠」である。

他方、「アサツテ君」による菅の描き方に頻度でも内容でも突出した特徴が見られなかったことについて、2011年3月11日に発生した東日本大震災、および東京電力福島第一原発事故の影響を看過することはできない。菅を描いた最後の作品は2011年2月1日号に掲載された図6であり、それ以降、首相は1度も「アサツテ君」に登場していないからである（本論文前編、とくに表8を参照）。対照的に、「自己主張型」の「地球防衛家のヒトビト」は、大震災以後も継続的に首相を描いている。前任者たちに比べ菅が必ずしも「描かれやすい」首相とはならなかった要因として、在任期間の途中から「アサツテ君」にまったく登場しなくなった事実は軽視できない。

大震災後に「アサツテ君」が首相を「描かなくなった」理由を実証的に説明づけることは難しいが、いくつかの解釈は可能である。

たとえば、大震災はその激烈さ、甚大さゆえに首相個人への関心をむしろ希薄化・分散化させた、と考えることができる。震災とその直後の原発事故は日本全体を揺るがす国難であり、首相個人というよりは、政府はもとより社会全体で対処する必要に迫られた災害であった。その規模と被害の大きさゆえに、最高政治指導者とはいえ1人の政治家を特定して描きにくかったのかもしれない。

上述の解釈に関連して、「アサツテ君」が「世論反映型」の時事的漫画である点も、大震災後に首相を描かなくなった要因として有力である。実際、作者は大震災や原発事故そのものを無視して

いるわけではなく、「電気が使えことのありがたさ」「節電」「防災対策」「募金」「復旧・復興への協力」など、市民生活に及ぼした影響を多数の作品で題材としている。「アサッテ君」にとって大震災は、とくに発生後しばらくの間は、政治問題というよりも、主人公一家のような庶民の日常生活に直結する問題であったのかもしれない。¹⁷

あるいは、大震災そのものは自然災害であるため、たとえ首相の事後対応などに問題があったとしても、「自己主張型」の「地球防衛家のヒトビト」と比べ「世論反映型」の「アサッテ君」ではそのことを首相を描くための題材にはしにくかったとも考えられる。

加えて、マス・メディアの報道を媒介として首相を描くことが多いという新聞4コマ漫画の特徴にかんがみれば、大震災直後、首相と同程度、あるいは首相以上に報道機関に頻出した政治家が別にいたことも考慮に入れるべきかもしれない。政府のスポークスマンとして連日のように首相官邸で情報発信をした枝野幸男官房長官はその1人で、震災発生から菅の辞任までの間に「アサッテ君」でその人とわかるように描かれている唯一の政治家である。2011年4月2日号（No.12514、図10）の作品がそれで、記者会見で「現時点ではただちに健康に影響を及ぼすとは考えていません」（1コマ）とのべる枝野をテレビ画面のなかに描いている。「世論反映型」の「アサッテ君」にとっては、政府の公式見解を頻繁に発表する、したがって一般市民が直接的に目にする機会が多い官房長官のほうが首相よりも描きやすかったのかもしれない。

いずれにせよ、東日本大震災や原発事故が「アサッテ君」や他の新聞4コマ漫画に与えた影響は、首相の描き方に着目する本論文ではなく、それ自体を主題とする別個の研究で詳細に分析されるべき課題である。大震災や原発事故と新聞4コマ漫画との関係が解明されれば、首相描写に関して先行研究が示した仮説——首相が描かれる多寡に影響を与えるのは支持率の数字そのものよりも、どれだけ社会の注目を浴びているかである——にも有用な示唆をもたらすかもしれない。

菅を示すシンボル（画像・文字・画像と文字）に目をむけると、画像のみ＝1本、文字のみ＝2本、併用＝3本と大きな偏りはなく、これといった特徴は見いだせない。「アサッテ君」で使用されるシンボルを首相別にまとめた表12を見ても、首相ごとに多少のばらつきはあれ、全員の合計値を見れば

表12 「アサッテ君」のシンボル使用（首相別）

| | 画像のみ | 文字のみ | 画像と文字（併用） |
|----|------|------|-----------|
| 小泉 | 6本 | 9本 | 1本 |
| 安倍 | 4本 | 3本 | 1本 |
| 福田 | 1本 | 1本 | 0本 |
| 麻生 | 3本 | 2本 | 3本 |
| 鳩山 | 5本 | 1本 | 1本 |
| 菅 | 1本 | 2本 | 3本 |
| 合計 | 20本 | 18本 | 9本 |

画像と文字はどちらも同程度に使われている (画像のみ=20本、文字のみ=18本、併用=9本)。

もっとも、本論文の前編で論じたように、新聞4コマ漫画全体で見ればシンボル使用については依然として解明すべき余地が多く残されている。菅の後任の野田、そして自民党の安倍 (第2次) についても、シンボル使用は継続的に考察していく必要がある。

最後に、先行研究に引きつづき本論文でも、マス・メディアの報道を通して登場人物が首相を見知る・語るという構図が少なくとも2本の作品で見られた点は注視に値する。図3と図5、見方によっては図1と図2でも、新聞の報道を媒介して首相を描く手法が使われている。補足的に、図9と図10では、それぞれテレビ画面に映る野田新首相と枝野官房長官が描かれている。

「アサッテ君」では、小泉から菅までの6人全員が複数の作品でマス・メディアの報道対象として描かれており、これは首相を作品化する際の定番の手法だといえる。過去の首相では、小泉を描いた16本では新聞7本とテレビ1本、安倍を描いた8本では新聞3本とテレビ1本、福田を描いた2本ではテレビ1本、麻生を描いた8本では新聞が少なくとも1本 (見方によっては2本) と雑誌1本、鳩山を描いた7本では新聞が2本、であった。「アサッテ君」では新聞など印刷物が放送媒体よりも多く使われる傾向がある。

先行研究がくり返し指摘しているように、マス・メディアを媒介させる描き方は「アサッテ君」以外にも広く見られる新聞4コマ漫画独自の特徴であり、本論文でも以後、折に触れて指摘する。本論文の後編で分析する「地球防衛家のヒトビト」(『朝日新聞』夕刊)にもテレビで伝えられる菅を描いた作品が複数ある。

・ウチの場合は (森下裕美) 『毎日新聞』(夕刊)

『毎日新聞』の夕刊で連載されている「ウチの場合は」(森下裕美)は、主人公一家である大門家の面々が家庭・学校・職場などでくり広げる日常生活を描いた、きわめて家庭的な4コマ漫画である。大門家は、小学2年生のボク・ユウヤ、小学5年生の姉・アサカ、広告代理店に勤務する父親・パン、優しくおっとりした母親・キョウコの4人からなる。拾われてきた飼い犬のモアもいる。彼ら以外にも、ユウヤの親友の信一や担任の先生、近所の人々、パンの同僚や上司など、さまざまな人物が登場する。「ウチの場合は」は、2001年6月に休止した「まっぴら君」(加藤芳郎)を引き継ぎ2002年1月4日号から連載を開始した。麻生太郎首相の在任期間中の2009年4月10日号に2,000回、連載開始から10年目となる野田佳彦政権時の2012年11月8日号に3,000回を迎え、本論文執筆時点(2015年7月)でも3,700回を超えてなお継続中である。¹⁸

作者の森下裕美は、本論文が分析対象とする漫画家のなかでもっとも若く、新聞4コマ漫画以外にも広く活躍している漫画家である。1962年に奈良県で生まれた森下は、1982年に「英語教師」で第6回ヤングジャンプ青年漫画大賞に準入選し、同年、「少年」(『月刊漫画ガロ』)でデビューした。同じ年に『週刊少年ジャンプ』でも「JUN」を連載し、その後は4コマ漫画を中心に活躍するが、2000年代に入ってから『大阪ハムレット』(双葉社、2006~10年、2009年に映画化)、『夜、海へ還るバ

ス』（双葉社、2008年）、『トモちゃんはすごいブス』（双葉社、2011～13年）、『なのなフォトゴロー』（双葉社、2014年～）など、家族や人間関係を主題とした社会派のストーリー漫画にも取り組むようになった。「ウチの場合は」は、作者にとってはじめての新聞連載漫画である。その他の代表作に「少年アシベ」（『週刊ヤングジャンプ』、1991年にアニメ化）、主な受賞歴として第21回日本漫画家協会賞優秀賞（1992年）、第10回文化庁メディア芸術祭優秀賞（2006年）、第11回手塚治虫文化賞短編賞（2007年）、などがある。¹⁹

菅の在任期間中、「ウチの場合は」が首相を描くことは1度もなかったが（339本中0本）、このことは連載開始以来の作風を考えれば何ら不自然ではない。小泉も在任期間中を通じて1度も描かれておらず（1,318本中0本）、安倍がようやく1本（245本中1本=0.40%）で作品化されたものの、福田（280本中0本）、麻生（275本中0本）、さらに描かれる頻度ももっとも高かった鳩山（209本中0本）でさえ1度たりとも登場することがなかった。つまり、小泉政権時に連載を開始してから菅が辞任するまでの約9年8ヵ月間で、本論文の定義に合致する方法で首相を描いているのは安倍の1本だけなのである。²⁰

先行研究がくり返し指摘しているように、「ウチの場合は」は家庭的な作風に徹し、政治家や政治問題をほとんど扱わない「純家庭的4コマ漫画」であり、連載を開始した小泉政権時からこの特徴がいささかも変わっていないことがわかる。本論文で順次指摘していくが、『読売新聞』（朝刊）の「コボちゃん」（441本中0本）、『朝日新聞』（朝刊）の「ののちゃん」（441本中0本）にも類似した家庭的な特徴が見られる。

「ウチの場合は」が「純家庭的」な漫画であることは、作者の森下自身もはっきりと認めている。2009年4月10日号で連載2,000回を迎えた際に、森下は連載のねらいをこう説明している。「タイトルにも表れているように、よそのウチに行くとなが家とはまったく文化が違うことがありますね。読んで人が『ウチの場合はこうだよ』と話したり、共感してもらえればうれしいです」。それから約3年半後、2012年11月8日号で連載3,000回を迎えた際にも作者は同様の発言をしており、さらに「なにげない日常が『ウチの場合は』のテーマ」だと語っている。誰もが「共感」できるような、ごく普通の家庭内のちょっとした出来事を描いていることがわかる。政治家や政治問題とは本質的になじまない漫画だといえる。²¹

しかし、その「純家庭的」な特徴ゆえに、本論文が定義する「首相を描いている作品」には該当しないものの、菅の在任期間中に首相の存在を強く示唆する作品が2本あったことは注目に値する。1本は菅を含む首相一般を、もう1本は菅の後任の野田佳彦を念頭に置いている。

いずれの作品も、家庭漫画の首相描写について先行研究が示した仮説の蓋然性を考える上で有用であるため、以下で内容紹介と若干の分析を試みる。その仮説とは、「ウチの場合は」のような家庭漫画で「首相が描かれるのは、政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼるほど首相の言動が社会で注目され、大きなニュースとして（とくにテレビなどマス・メディアで）報道されている場合にほぼ限定される」というものである。つまり、政治家や政治問題をほとんど扱わない家庭漫画で首相が描

ウチの場合は

森下裕美

(2590)

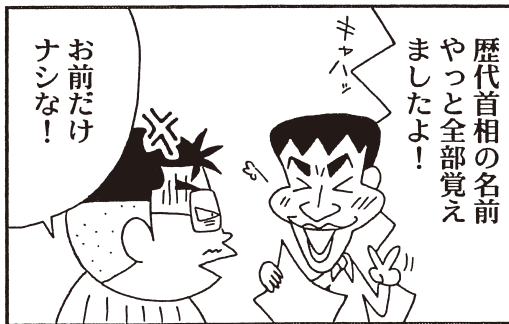
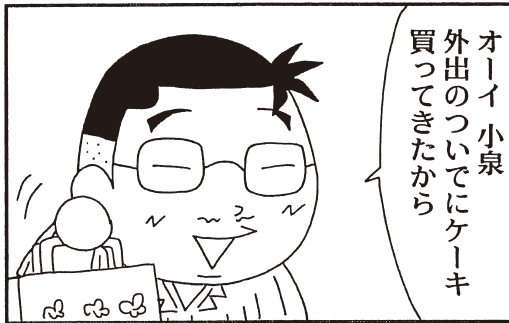
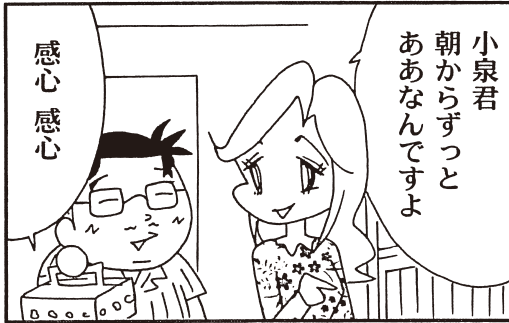


図11 2011年5月20日号 (No.2590)

かれるのは、マス・メディアでくり返し話題にされるなど、首相の言動がそれだけ社会全体で注視されている場合に限られる、というのである。

まず1つは、2011年5月20日号 (No.2590、図11) の作品で、仕事をせずに「歴代首相の名前 やっと覚えましたよ!」(4コマ) という同僚 (小泉) にパンが気分を害するという、職場での些事を描いた「ウチの場合は」では典型的な内容である。小泉の台詞にある「歴代首相」には昔も含まれていると推測できるが、「文字により直接的に菅首相に言及している」とはいえないため、本論文が定義する「首相を描いた作品」には該当しない。

しかし、本論文にとって重要なのは、震災対応への不満などを理由として首相の辞任を求める「菅降ろし」が当時さかんに報道されていた事実をふまえれば、図11は先行研究が示した仮説をある程度は補強すると解釈できることである。安倍晋三から鳩山由紀夫までほぼ1年ごとに首相が交代し、さらに菅 (2010年6月8日就任) までも短期間で辞任する可能性がマス・メディアで広く報道され、その去就が社会全般で注目を集めていたからである。実際、図11の掲載から約2週間後の6月2日、菅は震災対応で「一定のめど」がついた段階で辞任する意向を表明し、その結果として野党が提出した内閣不信任決議案が否決されていた。一国の政治的最高指導者の顔ぶれが次々に変わる事態は、十分に「政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼる」ような事象であるといえ、それゆえに「純家庭的」な「ウチの場合は」でも「歴代の首相の名前を覚える」ことが題材になったと考えられる。参考までに、「地球防衛家のヒトビト」(『朝日新聞』夕刊)にも、安倍以降首相が「毎年かわってる」ことを主題とする作品があ

る（2011年9月2日号）。この作品は本論文の後編で分析する予定である。²²

もう1本、2011年9月1日号（No.2663、図12）の作品は、図11よりもはるかに「首相を描いている作品」に近く、仮説の当否を考察する上でより有力な判断材料となる。「ボクのコトはどじょうって呼んでくれ!!」（2コマ）と自己紹介する転校生の台詞、そして彼の背後の黒板に「田よしひこ」（2コマ）と書いてあることから、前任者の菅から首相の座を引き継ぐことが決定していた野田佳彦をさしていることは間違いない。野田は民主党代表選の政見表明（8月29日）で、「どじょうだが、泥臭く、国民のために汗をかいて政治を前進させる」と発言し、その直後の決選投票で当選をはたしていた。「どじょうがさ 金魚のまね することねん だよなあ」という詩人・相田みつをの作品を引用したものである。ただし、この作品が掲載された9月1日はまだ菅の在任期間中であるため（翌9月2日が野田の就任日）、本論文が定義する「首相を描いている作品」には含まれない。

「次期」とはいえ、政治家とはほぼ無縁なはずの「ウチの場合は」で近く首相となることが決定している人物が強く示唆されていることは、先行研究が示した仮説を用いれば無理なく説明できる。政界の最高峰にのぼりつめようとする政治家が自身を「どじょう」にたとえたことは、新首相の人柄を示すエピソードとしてマス・メディアでくり返し報道されていたし、「どじょう」に関連する商品が売れるなど社会的な反響も大きく、「政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼる」言動だといえるからである。なお、前述した「アサッテ君」にも「どじょう」と発言する野田を描いた作品（図9）があったし、後編で取りあ

ウチの場合は

森下裕美

(2663)



図12 2011年9月1日号（No.2663）

げる「地球防衛家のヒトビト」にも同じような作品が1本(2011年9月1日号)ある。家庭漫画にとって、そしてもちろん時事漫画にとっても、一国の最高権力者になる予定の人物がみずからを「どじょう」と形容する意外性は、新聞4コマ漫画の題材になりやすかったと考えられる。²³

もっとも、菅の在任期間中、「ウチの場合は」は現職の首相を1度も描いていないわけだから、いくら図11と図12が「首相」の存在を強く示唆しているにしても、首相描写に関する仮説を考える上では「間接証拠」でしかない。「描かれない理由」を突きとめることは本質的に困難であるため、今後、「ウチの場合は」がいかなる作品で首相など政治家や政治問題を描くのかを注視しつづけ、少しでも参考になる事例を積みあげていく必要がある。

最後に、東日本大震災、および東京電力福島第一原発事故は「ウチの場合は」にも一定の影響を及ぼしており、複数の作品にその余波が見られる。あくまで「純家庭的」な作風の範囲内に収まるものばかりであるが、明らかに震災や原発事故を念頭に置いて「恐怖感」「節電」「将来への希望」「悪夢」「娯楽の自粛」「防災対策」などを描いた作品がある。この点では、同じく庶民の日常生活への影響を題材としている「アサッテ君」、そして後述する「コボちゃん」(『読売新聞』朝刊)との共通性が認められる。²⁴

大震災が作品に一定の影響を及ぼしたことは、作者自身も言明している。2012年11月8日号で連載3,000回を迎えた際、『毎日新聞』のインタビューで森下は、「世の中は止まらずに動いていて、その時できることは描くことだけだった。……日本が大変な時に、4コマ漫画なんて描いていていいのだろうか、という思いもありました」とのべた上で、「どんな時も、できることをするしかないんですよ。……何かしら手助けになれば」と意識して描きつづけたと語っている。²⁵

首相描写に関する既述の仮説を援用すれば、大震災や原発事故は「政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼるほど社会で注目され、大きなニュースとして(とくにテレビなどマス・メディアで)報道されている」がゆえに、家庭色の強い「ウチの場合は」でも頻繁に取りあげられたと考えられる。同じことは、以下で分析する「コボちゃん」についてもいえる。いずれにせよ、大震災や原発事故が新聞4コマ漫画でどのように描かれているかは、本論文とは別に独立した研究で詳しく検討すべき問題である。

・コボちゃん(植田まさし)『読売新聞』(朝刊)

『読売新聞』の朝刊で1982年4月から連載されている「コボちゃん」(植田まさし)は、主人公一家の日常生活を描ききわめて家庭的な4コマ漫画である。連載8,000回を機に2004年12月1日号から(一部地域除く)全国紙の4コマ漫画としてはじめてカラー化され、菅が首相に就任した直後の2010年6月14日号で連載1万回に到達した。2012年4月には連載30周年を迎え、本論文執筆時点(2015年7月)でも1万1,700回を超えてなお継続中である。

「コボちゃん」に登場する主要人物は、幼稚園児(途中から小学生)の主人公・コボ(田畑小穂)とその家族、会社員の父親・耕二、専業主婦の母親・早苗、妹・ミホ(実穂)、祖父・山川岩男、祖

母・ミネ、それに親戚の大森竹男である。飼い猫のミーと犬のポチもしばしば家族の一員のように登場する。一家は東京都の私鉄沿線に居住している。「コボちゃん」は作者の幼少時代の愛称であるという。なお、コボの妹・ミホは上述の連載1万回目の作品（2010年6月14日号）で誕生し、名前は公募で集まった候補のなかから作者が選んだ。ミホの誕生と成長にともない、連載開始当初より5歳に設定されていたコボも「たんぼ幼稚園」を卒園し、2011年4月に「みどり小学校」に入学している。²⁶

作者の植田まさし（本名・植田正通）は、とくにサラリーマンむけの4コマ漫画を得意とする漫画家で、その活躍ぶりは「彼の作品が人気を博し、その結果として4コマ漫画専門雑誌が刊行され〔るなど〕4コマ漫画における革命児」と評されるほどである。植田は1947年に東京都世田谷区に生まれ、香川県で育った。1969年に中央大学を卒業後、1971年に「ちょんぼ君」（『週刊漫画TIMES』）でデビューした。以来、4コマ漫画を中心に執筆活動をつづけている。その他の代表作として、「かりあげクン」（『漫画アクション』など）、「フリテンくん」（『月刊まんがライフ』など）、「のんき君」（『週刊漫画TIMES』）、などがある。「コボちゃん」と「かりあげクン」はテレビアニメ化、「フリテンくん」は映画化、「のんき君」はドラマ化されている。主な受賞歴に、第28回文藝春秋漫画賞（1982年）、「コボちゃん」で受賞した第28回日本漫画家協会賞優秀賞（1999年）がある。²⁷

作品の分析に移ると、「コボちゃん」はきわめて政治色の薄い「純家庭的4コマ漫画」で、菅の在任期間中に首相を描いた作品は皆無（441本中0本）であった。『毎日新聞』（夕刊）の「ウチの場合は」（339本中0本）や『朝日新聞』（朝刊）の「ののちゃん」（441本中0本）と同様、政治家や政治問題とはほぼ無縁の典型的な家庭漫画であることがわかる。菅が首相になった直後、連載1万回を達成した際に作者を紹介した『読売新聞』の記事も、「コボちゃん」を「家庭漫画」と特徴づけている。²⁸

首相を登場させることがほとんどないという点では、少なくとも小泉政権時から「コボちゃん」の「純家庭的」な作風はほぼ一貫している。先行研究によれば、5年5ヵ月に及んだ在任期間中に小泉を描いた作品は1,922本中1本（0.05%）だけで、その後もほぼ変わらず、安倍は356本中0本、福田は355本中1本（0.28%）、麻生は347本中0本、小泉以降の首相で「もっとも描かれやすい」鳩山でさえ259本中0本、と頻度はきわめて低いままである。小泉から菅までの約10年4ヵ月間を通じて、本論文の定義に合致する方法で首相を描いた作品はわずか2本しかない。しかも、その2本とも政治的な批評性・風刺性をほとんど含んでいない。「コボちゃん」の作品世界に首相が入り込む余地は極端に少なく、先行研究が「純家庭的4コマ漫画」と特徴づけているのも十分に首肯できる。²⁹

とくに菅政権時の「コボちゃん」は、首相就任から6日後の2010年6月14日号（No.10000）の作品で早苗がミホを出産したことで、それ以前よりもさらに政治性を希薄化させたと考えられる。先行研究によれば、「コボちゃん」では首相が作品に登場することはほとんどないものの、かといって政治家や政治の話題がまったくのぼらないわけでもなかった。麻生の在任期間中には、登場人物たちはしばしば、選挙など社会で大きな関心を集めた政治的な問題や出来事について語りあい、さらにはそ

コボちゃん

植田まさし 10249




れに参加している。加えて、1本だけではあるが、政権交代に対する政治風刺が認められる作品さえあった。しかし、鳩山が首相に就任してから約1ヵ月後の2009年10月14日号 (No.9764) の作品で早苗の妊娠が判明し、さらに菅に交代した直後に出産したことで、漫画全体の方向が新しい家族の誕生にむいてしまった。偶然にも、民主党が政権交代を実現したのとほぼ同時に、それ以前からの特徴である家庭色がさらに強まり、その分、よりいっそう政治色が薄まったと考えられる。³⁰

とはいえ、多少なりとも政治的な題材や政治家を扱っている作品も2本あり、かつそのうちの1本は家庭漫画による首相描写についての仮説に深くかかわる内容であるため、以下で内容紹介と若干の分析をおこなう。

1本目は2011年2月25日号 (No.10249、図13) の作品で、やや曖昧ではあるが首相を含めた日本の政治指導者たちに対する批評性・風刺性を読みとることができる。

- ・海外の反政府デモを伝えるテレビを見ながら、ミネが岩男に「日本でも起きるかしら」と尋ねる (1コマ)
- ・「多少の問題はあるけどおきないだろう」と答える岩男に対して、ミネが「そうね」「いまはちょっとゴタゴタしてるのと国民不在ぐらいですものね…」と冷静に応じる (2～3コマ)
- ・デモがおきていないか確かめに岩男が国会議事堂前まで出むく (4コマ)

テレビが伝えている「複数の国で反政府デモ」 (1コマ) は、当時、中東や北アフリカ諸国で民主化を求める市民の反政府デモが頻発していたことをさしている。

図13 2011年2月25日号 (No.10249)

図13で注目すべきは、ミネの発言を気にかけて国会議事堂まで出むく岩男を描くことで、具体性には欠けるものの、日本の政治指導者たちが「国民不在」で「ゴタゴタ」しているという批評・風刺を展開していることである。夫婦が何について不満や不安を感じているのかは必ずしも明らかではない。しかし、この作品が掲載された当時の主要な出来事をふまえると、民主党の代表を務めたこともある小沢一郎が資金管理団体の土地取引をめぐる事件で東京地裁へ強制起訴され（1月31日）、その結果として党員資格を停止（2月22日）させられるまでの与党内での意見対立をさしていると考えられる。曖昧ではあるが、政治的な批評性を含むこのような作品は「純家庭的」な「コボちゃん」ではめずらしい。

もう1本は、「次期」とはいえ「首相」を描いている点で本論文にとってははるかに重要な意味をもつ。2011年8月31日号（No.10432、図14）の作品がそれで、酒場で他の客と孫談義をする岩男が、「新しい首相は…」（3コマ）と相手が話題を変えるまで孫自慢をしつづける、という内容である。なお、この作品中の「新しい首相」は明らかに現職の菅の後継者である野田佳彦をさしているため、本論文が定義する「首相を描いている作品」には該当しない。野田は8月29日の民主党代表選で当選し、この作品が掲載された時点で首相に就任することが確定していた。

まず、図14の主題はあくまで「孫をかわいがる祖父」であり、「純家庭的4コマ漫画」として典型的な作品である。酒場での会話に「首相」は登場するが、それは相手が話題を変えるまで孫自慢をしつづける岩男の愛情を表現するための状況設定にすぎず、「首相」でなければ作品が成立しないわけではない。政治家や政治問題とほぼ無縁で

コボちゃん

植田まさし 10432





図14 2011年8月31日号（No.10432）

ある「コボちゃん」のこれまでの作風の枠内に十分に収まる内容である。

他方、それでもなお作中で「首相」という言葉が使われた事実は、先行研究が示した仮説を援用することで無理なく説明できる。つまり、既述のように「一定のめど」をもって辞任することがそれ以前から論争的になっていた首相がついに退任し「新しい首相」が誕生することは、間違いなく「政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼるほど社会で注目され、大きなニュースとして（とくにテレビなどマス・メディアで）報道」された社会的重大関心事であり、それゆえに「純家庭的」な「コボちゃん」でも題材になったと考えることができるからである。

もちろん、図14は本論文が定義する「首相を描いている作品」ではないため、仮説の蓋然性や「コボちゃん」の首相の描き方については、さらなる研究の積みあげが欠かせない。「ウチの場合は」と同じく、「コボちゃん」についても継続的に作品を分析していく必要がある。

最後に付言すると、東日本大震災や福島での原発事故は、「コボちゃん」でも頻繁に作品の題材となっている。作者がはじめて震災を取りあげたのは2011年3月14日号（No.10266）の作品で、節電のために耕二がヒゲそりを途中で切りあげる、という内容である。その後も、「無力感」「募金」「買い占め」「落ちて割れた盆栽」「日本人のマナーのよさ」「計画停電」「復旧・復興」「自粛」「団結・協力」など、主人公一家のような一般庶民にも及んだ震災の影響が描かれている。『読売新聞』の記事が指摘しているように、「世の中の出来事を『コボちゃん』一家の枠内で処理する従来の方法は守りながら、震災後の普通の市民の心情を漫画に映し出していった」といえる。³¹

既述のとおり、市民の日常生活に関連づけて大震災を描く特徴は「アサッテ君」と「ウチの場合は」にも共通して見られたが、必ずしも「被災地」を本拠としない全国紙の4コマ漫画としては、それ以外に適切な描き方がなかったのかもしれない。『読売新聞』に掲載されたインタビューで作者の植田まさしは、「被災者の気持ちを考えどういう風に描いたらいいのかと迷い、気を使ってネタを考えました。時間もいつもより長くかかりましたね」とのべた上で、「家族や家を失った人ほどではないけれど、東京に住む私も心にダメージを受けていた。だから、震災のことも触れられたのかもしれない」と語っている。³²

なお、「コボちゃん」を含め大震災により連載が中断した全国紙の4コマ漫画はなかったが、過酷な被害を伝える同一紙面に漫画を載せつづけることには葛藤があったようである。植田は連載から30年間で休載したのはひどい風邪など10数日に過ぎないが、大震災に際しては連載中断を真剣に考えたという。それでも最終的に描きつづけることにした経緯を、作者は次のように説明している。「被災地の大変な状況をテレビで見ている、『漫画なんか描いている場合じゃない』と考えてしまいました。[3月11日の夜]新聞社に電話して判断を仰いだんです。結局、『地震でみんなが心を痛めている時だからこそ、笑いを届けてほしい』と言われ、続けることになりました」。³³

注

12 作者自身や漫画の登場人物については、以下の記事などが参考になる。内藤麻里子「朝刊4コマ漫画『アサッテ君』 おめでとう、きょう1万回」『毎日新聞』2003年11月5日、内藤麻里子「読書日和 東海林さだお

さん みみっちく、まじめで大胆なショージ節』『毎日新聞』2011年6月7日夕刊、内藤麻里子「『アサッテ君』40周年 東海林さん『毎日夢中…3割打者でいい』』『毎日新聞』2014年6月16日、内藤麻里子「きょうで1万3571回 『アサッテ君』40周年 いいこと描き継いで』『毎日新聞』2014年6月16日、内藤麻里子「アサッテ君 1万3616回 一般全国紙の漫画最長に』『毎日新聞』2014年8月1日、内藤麻里子「東海林さだおさん40年間『アサッテ君』ありがとう』『毎日新聞』2014年12月19日、東海林さだお「また日本のどこかで』『毎日新聞』2014年12月19日、内藤麻里子「40年『よくやってきた』 最終回、東海林さだおさん感慨』『毎日新聞』2014年12月31日。

なお、菅の任期中、「アサッテ君」は2度にわたり臨時に「休載」している。初回は2011年2月4日号、2度目は同年6月24日号から7月17日号までである。いずれも、休載の理由は紙面で説明されていない。

「桜田です!」（いしかわじゅん）の連載開始については、「社告『桜田です!』 新・朝刊漫画 いしかわじゅんさん作 来月1日スタート」『毎日新聞』2015年1月22日、内藤麻里子「桜田です! 『登場人物の動き楽しみ』 新連載、いしかわさん意欲」『毎日新聞』2015年2月1日、が参考になる。

- 13 東海林の生い立ちや漫画家としての経歴については、東海林さだお『東海林さだお自選 なんとって「ショージ君」 東海林さだお入門』（文春文庫、2003年）などが参考になる。
- 14 菅を描いた6本は、以下の号に掲載されている。2010年6月10日号（No.12243）、2010年9月3日号（No.12310）、2010年10月31日号（No.12366）、2010年11月16日号（No.12381）、2011年2月1日号（No.12456）、2011年2月17日号（No.12470）。
- 15 「影の首相」という表現を使って仙谷官房長官の影響力の大きさ伝える記事は、「アサッテ君」が連載されている同時期の『毎日新聞』に限っても複数見つかる。代表例として、「仙谷官房長官 『影の首相』 矢面に『脱小沢』、内政・外交主導」『毎日新聞』2010年10月23日、中澤雄大「特集ワイド けんもほろろの取材対応…ならば知る人に聞こう 影の首相の顔」『毎日新聞』2010年10月28日夕刊、などがある。
- 16 図4は批評・風刺性の薄いパターン1に属するが、その3日後、2010年9月6日号（No.12313）の作品は、首相を描いてはいないものの菅と小沢が対立していることをはっきりと批評・風刺する内容である。寿司を食べようとしている昼吉が「トロとイカと交換しない?」と夕子にもちかけるが、「ダメ!」と断られ、「もともとトロイカ方式はムリなんだよね」とほえみあう。「トロイカ方式」とは、ロシアの3頭立ての馬車になぞらえ、菅・小沢・鳩山が対等な立場で協力しあって民主党を運営する体制をさす表現である。寿司のネタにかけたダジャレにはしているが、民主党の有力者同士が選挙でぶつかりあう様を揶揄していることは明白である。
- 17 日常生活を営む庶民の観点から大震災や原発事故の影響を描いた作品は多い。震災発生から1ヵ月以内に限っても、以下の号に掲載されている作品がある。2011年3月20日号（No.12501）、2011年3月23日号（No.12504）、2011年3月26日号（No.12507）、2011年3月28日号（No.12509）、2011年3月29日号（No.12510）、2011年3月30日号（No.12511）、2011年3月31日号（No.12512）、2011年4月1日号（No.12513）、2011年4月3日号（No.12515）、2011年4月6日号（No.12518）、2011年4月7日号（No.12519）、2011年4月10日号（No.12522）。
- 18 作者自身や漫画の登場人物については、次に示す新聞記事が参考になる。五十嵐英美「夕刊で好評連載『ウチの場合は』『大門さんち』を語る 森下さん」『毎日新聞』2002年2月22日夕刊、「夕刊連載4コママンガ『ウチの場合は』 こんな人たちが大活躍」『毎日新聞』2003年6月24日夕刊、「森下裕美さん 4コマ漫画『ウチの場合は』2000回超え 創作の舞台裏」『毎日新聞』2009年4月15日夕刊、内藤麻里子「ウチの場合は3000回 きょうも『ウチと一緒』」『毎日新聞』2012年11月8日夕刊、内藤麻里子「ウチの場合は やりがいい積み重ね3000回 森下裕美さんと振り返る」『毎日新聞』2012年11月9日。加えて、連載3,000回を記念して出版された森下裕美『ウチの場合は ベストセレクション 連載3000回スペシャル』（毎日新聞社、2012年）も有用である。
- 19 新聞4コマ漫画以外の森下の作品については、内藤麻里子「森下裕美さんが新作漫画『夜、海へ還るパス』」『毎日新聞』2008年6月11日夕刊、内藤麻里子「Interview 森下裕美さん 普通に生きる努力描く『なのなフォトゴロー』」を出版『毎日新聞』2014年6月11日夕刊、などが参考になる。
- 20 安倍を描いた1本は2007年9月22日号（No.1562）の作品で、その分析は本論文前編の後注3で示した水野・福田「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（中編）」でおこなっている。
- 21 内藤麻里子「『ウチの場合は』2000回」『毎日新聞』2009年4月10日夕刊、内藤麻里子「ウチの場合は3000回 きょうも『ウチと一緒』」2012年11月8日夕刊、内藤麻里子「ウチの場合は やりがいい積み重ね3000回 森下

- 裕美さんと振り返る」2012年11月9日。
- 22 「ウチの場合は」が連載されている『毎日新聞』に限っても、「菅降ろし」を論じる記事は多数ある。主要なものとして、たとえば、小松浩「反射鏡 被災地の痛苦と政治家の軽薄」『毎日新聞』2011年5月1日、人羅格「論調観測 統一選民主敗北と『菅降ろし』 続投容認、にじむ苦悩」『毎日新聞』2011年5月1日、岩見隆夫「近聞遠見 『菅降ろし』と政治報道」『毎日新聞』2011年5月7日、松田喬和「松田喬和の首相番日誌 菅、三木政権酷似説」『毎日新聞』2011年5月7日、などがある。
- 23 「どじょう」が話題になっていることを伝える記事も多く、たとえば、次のようなものがある。「特集ワイド 誕生『どじょう』 宰相 師・細川元首相もエール 泥まみれになれるか」『毎日新聞』2011年9月1日夕刊、「野田内閣 『どじょう』 新首相、期待と不安」『毎日新聞』2011年9月2日夕刊、伊藤智永「発信箱 どじょう占い」『毎日新聞』2011年9月6日、「ファイル 野田首相に金魚のようなどじょう贈る」『毎日新聞』2011年9月10日、「どじょう首相って？ 大衆的でも農業に弱いよ」『朝日新聞』2011年8月30日、「どじょうに乗れ 相田さんの本増刷」『朝日新聞』2011年9月2日夕刊、「どじょう宰相 庶民の味 酒とだじゃれと1000円散髪」『朝日新聞』2011年9月3日。
- 24 「アサツチ君」ほどではないが、「ウチの場合は」にも大震災や原発事故に関連すると考えられる作品は多い。震災発生から1ヵ月以内に限定しても、以下の号に掲載されている作品がある。2011年3月16日号 (No.2539)、2011年3月17日号 (No.2540)、2011年3月18日号 (No.2541)、2011年3月28日号 (No.2548)、2011年3月29日号 (No.2549)、2011年3月31日号 (No.2551)、2011年4月1日号 (No.2552)、2011年4月2日号 (No.2553)、2011年4月11日号 (No.2560)。
- 25 内藤麻里子「ウチの場合は やりがい積み重ね3000回 森下裕美さんと振り返る」2012年11月9日。
- 26 作者自身や漫画の登場人物については、次に示す新聞記事が参考になる。「コボちゃん10000回」『読売新聞』2010年6月14日、「コボちゃん妹 『ミホ』 ちゃんに」『読売新聞』2010年6月16日、佐藤憲一「気になる！ コボちゃん来年は小学生」『読売新聞』2010年12月15日、「コボちゃん入学記念 ご両家夢の共演 *植田さん・けらさん対談」『読売新聞』2011年4月6日、「笑顔届け1万640回 コボちゃん きょう30周年」『読売新聞』2012年4月1日。
- 27 山口佐栄子「4コマ漫画」、夏日房之助・竹内オサム編・著『マンガ学入門』（ミネルヴァ書房、2009年）、12。
- 28 「笑みコボれる28年」『読売新聞』2010年6月14日。
- 29 小泉と福田を描いたのは、それぞれ2001年4月27日号 (No.6761) と2008年9月4日号 (No.9371) の作品であり、それらの分析は本論文前編の後注3で示した新庄・水野ほか「新聞4コマ漫画が描く小泉劇場（後編）」、および水野・福田「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（中編）」でおこなっている。
- 30 政権交代に対する風刺が込められていると考えられるのは、麻生の在任期間中に掲載された2009年9月4日号の作品 (No.9725) である。「政権が交代して日本はどれくらい変わりますかねー」と意見を求める耕二に、岩男が腕組みを変えながら「これくらいかな」、つまり、大きな変化は望めないという旨の回答をしている。この作品の分析は、本論文前編の後注3で示した水野・福田ほか「新聞4コマ漫画が描く麻生太郎首相（中編）」でおこなっている。
- 31 「笑顔届け1万640回 コボちゃん きょう30周年」2012年4月1日。震災発生から1ヵ月以内だけでも、以下の号に掲載されている作品で大震災や原発事故が扱われている。2011年3月14日号 (No.10266)、2011年3月15日号 (No.10267)、2011年3月16日号 (No.10268)、2011年3月17日号 (No.10269)、2011年3月18日号 (No.10270)、2011年3月19日号 (No.10271)、2011年3月29日号 (No.10281)、2011年3月30日号 (No.10282)、2011年4月3日号 (No.10286)、2011年4月5日号 (No.10288)。
- 32 「笑顔届け1万640回 コボちゃん きょう30周年」2012年4月1日。
- 33 「笑顔届け1万640回 コボちゃん きょう30周年」2012年4月1日。ただし、他紙の4コマ漫画には連載を中断したものもあった。『東京新聞』などで連載されていた「ちびまる子ちゃん」（さくらももこ）は、作者が「被災地の方々の苦境を思い、しばらく休んで状況を見守りたい」として、2011年3月18日号の作品以降、同月31日まで休止している。（「『ちびまる子ちゃん』休載します」『東京新聞』2011年3月18日。）

【Abstract】

Prime Minister Naoto Kan in Newspaper Comic Strips (Part 2):
An Analysis of Comic Strips in the Three Major
National Newspapers in Japan 2010–2011

Takeya Mizuno

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Minister Naoto Kan during his tenure, from June 8, 2010 to September 2, 2011.

As the second installment of a multiple-part series, this article (Part 2) analyzes qualitatively how *Mainichi*'s "Asatte Kun" (Mr. Day-after-Tomorrow), "Uchi no Baai ha" (In Case of our Family), and *Yomiuri*'s "Kobo Chan" (Kobo, the Li'l Rascal) depicted Prime Minister Kan.

In the later installments which are planned to appear in the upcoming issues, comic strips of *Asahi* will be analyzed qualitatively, and conclusions will be presented.